
プリキュアショートシアター ♪

仮面紳士

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

プリキュアショートシアター ♪

【Nコード】

N7457V

【作者名】

仮面紳士

【あらすじ】

プリキュアオールスターズが短編で大活躍！ なぎさが笑い、咲が叫んで、のぞみがボケて、ラブが更にボケて、つぼみがツッコみ、響がハジける、でも時々シリアスで、ちょっぴり泣けるかもしれない、いろんなプリキュアをお楽しみください♪

その「プリキュアショートシアターとは？」(前書き)

ゆり「最初に言っておくけど、今回私は出ないわ」

いつき「前書きを使って言っているんじゃないですよー!？」

その「プリキュアショートシアターとは？

なぎさ」「……」

ほのか「なぎさ、なぎさ！もう始まつてる！」

なぎさ「え！？うそっ！」

ひかり「ほら！」「挨拶しましょう！」

なぎさ「う、うん！じゃみんな、いっくよー！」

全「プリキュアショートシアターへようこそ！」

咲「このシアターは私達プリキュアが！」

のぞみ「短編で色々やっちゃうよー！」

ラブ「笑いあり、シリアスはちょっとあり、涙は…あるのかな？」

つぼみ「えっ！？…どうでしょう…？」

響「まあとにかく、ここで決めなきゃ女がすたる！みんな張り切って行こー！！」

全「おーっ！！」

奏「ちなみに本作は多大なキャラ崩壊成分を含んでおります」

エレン「キャラ崩壊って……どんな風に？」

奏「あんな風に」

エレン「？」

舞「ああ、咲い…可愛いよ咲い…どうしてこんな可愛いのか？その広いおでこをペロペロして×××を×××して（自主規制）を（放送禁止）したいよお…」↑スケッチの咲の絵を抱いて悶えている。

エレン「ひどい…色々ヒドイ」

奏「まあ、あれは極端な例だけどね。とにかく…」

エレン「プリキュアショートシアター…」

かなエレ「スタートです♪」

舞「咲、咲iiiiiiiiiiii…！！！！！！」

ビート「やつかましいわああああああ！！！！」↑ビートソニック

発射

チュドーン!!

こんな駄小説ですがよろしくお願いします。

その一・プリキュアショートシアターとは？（後書き）

ゆり「ついでに言っておくとこれ書いてる時点で作者はスプラッシュ
ユスターをDVD換算で六巻までしか見ていないわ」

いつき「言わなきゃ解らないことを!？」

その二・えりかの低身長脱却作戦！（前書き）

響「探せばどこにでもありそうなネタだよね」

奏「確かに」

えりか「うるさいなーもう！！切実なのこっちは！！」

その二・えりかの低身長脱却作戦！

えりか「むむむ…」

つぼみ「どうしたんですか、えりか」

えりか「なんで……」

えりか「なんでアタシは背が低いのよ……っ……!!」

ゆり「文句はキャラデザイナーに言いなさい」

つぼみ「ゆりさん、そんな身も蓋もない…」

いつき「でも僕らハートキャッチ組は、他と比べると確かにデフォルトメされた感があるけどね」

えりか「そんな訳で！いつき！ゆりさん！背を伸ばす方法教えて！」

つぼみ「えっ、えりか！？何で私には聞いてくれないんですか！？」

えりか「だっていつきやゆりさんの方が背高いし、ぶっちゃけつぼみは…頼りない」

つぼみ「ガーンッ！！」

いつき「そうは言っても僕らも特に意識してないし」

ゆり「だからキャラデザイナーの人に言いなさい」

つぼみ「そもそも何で急にそんなことを？」

えりか「これ見てよ」

いつき「ん？オールスターズDX3身長対比表？」

ゆり「DX3の初回限定版の映像特典のアレね」

つぼみ「これがどうかしたんですか？」

えりか「どうかしたじゃないよ！！なにこれアタシ年下より小さいじゃん！」

いつき「ホントだ、ひかりより小さい」

つぼみ「でもそんなに気にすることも無いと思いますよ？えりかには良いところ沢山ありますから！」

えりか「つぼみ…抱いて」

つぼみ「何言ってんですかえりか！？」

ゆり「えりか！！つぼみを抱くのは私よ！！」

つぼみ「ゆりさんも何言ってんですか！？」

いつき「僕も抱きたいです！！」

つぼみ「いつきまで!？」

閑話休題。

えりか「てことで皆の意見を聞こうと思う。どう、なんかある？」

りん「いやいやいや、展開飛ばしすぎでしょ!」

ゆり「大丈夫よ、問題ないわ」

美希「問題大有りでしょ!! どんだけスピード展開なの!!」

えりか「いやね? 正直アタシ達だけで進めるのはやっぱり無理あるな。って作者が」

エレン「作者の都合かい!! どんだけ無計画なの!!」

えりか「そんな今更なことはどうでもいいの!!とにかくアタシは背を伸ばしたいの今すぐ!!」

咲「ちなみにどのくらい?」

えりか「もも姉、もしくはゆりさん、あるいは美希でも可」

美希「あたしオマケ扱い!?!」

なぎさ「でも今すぐって無理だと思うんだけど…ねえほのか」

ほのか「出来るわよ」

なぎえり「マジで?!?!」

ほのか「ええ、私が暇潰しに作ったこの『セノビールX』を飲めばたちどころに伸びていくわ」

なぎさ「暇潰しなの!?!」

ほのか「調合に三時間」

ひかり「暇潰しにかかる時間じゃないですよ!?!」

ほのか「というわけでえりかさん、実験台よろしくね」

かれん「もう少しオブラートに包みなさいよ…」

ほのか「そうですね…じゃあえりかさん、テストプレイヤーに」

くるみ「いい感じに言い換えた!？」

えりか「オツケー!」

つぼみ「迷い無い即答!？」

そんな訳で、

えりか「ふふふ…これを飲めばアタシは…」

つぼみ「大丈夫でしょうか…?」

いつき「大丈夫だよ…多分」

ゆり「ギャグだから死ぬことは無いわよ（笑）」

つぼみ「すいません黙っててください割りとマジで」

いつき「あつ、飲むよ!」

えりか「さようならおチビなアタシ!こんにちは大人なアタシ!いざ!」↑飲む

ほのか「あ、飲んじやった?」

つぼみ「ほのかさん?」

いつき「今ちようど口をつけたところで…どうかしたんですか?」

ほのか「実はあの薬、致命的な欠陥があったの思い出して伝えに来ただけど…もう遅かったみたいね…」

ゆり「欠陥?」

つぼみ「何か副作用が!？」

ほのか「そこまでの物じゃ無いんだけど…」

えりか「ゲツブアツ!?!?!?」↑口に含んだ分全部吐き出した

つぼみ「えりかあああ!？」

いつき「えええええ!？」

ゆり「どういう事？」

ほのか「実はあれ、効果は確かなんだけど口に入れられないほど不味くて…私も試飲してぶっ倒れたの」

いつき「ダメじゃん!!決定的にダメじゃん!!」

つぼみ「えりかあああ大丈夫ですかあああ!？」

えりか「」↑失神

ゆり「結局、楽な手段に頼らず、自分で努力するしかないというこ
とね」

いつき「なんか綺麗に纏めた!？」

おしまい

その二・えりかの低身長脱却作戦！（後書き）

ほのか「私のキャラがブレてる？そんなこと気にしちゃダメよ」

なぎさ「いちいち言わなくていいよそんなこと！」

その三・ピンクプリキュアのケーキ大争奪戦！　く美墨なぎさの激怒く（前書き

こまち「羊羹パーティーなら参加できたのに…」

かれん「こまち…」（汗）

その三・ピンクプリキュアのケーキ大争奪戦！　く美墨なぎさの激怒く

ケーキ…それは世の女性を虜にする魅惑のスイーツ。女性達は己が欲望が示すまま、それを求め集う。

これは一つの町で起こったケーキに始まりケーキに終わる物語である。

ゆり「ふう、モノローグって結構疲れるわね…」

いつき「ってアンタが喋ってたんかい!？」

のぞみ「このケーキ美味し〜」

なぎさ「でっしょー？この前駅前にオープンしたばかりのケーキショップで買ってきたんだ」

つぼみ「ホントに美味しいですね〜」

ラブ「モンブランゲットだよっ!」

咲「あーっ!!それ私が狙ってたのに!」

響「でもみんな来れなかったのは残念だよね〜」

つぼみ「みんな予定が重なったんじゃないですよ。あつ、ガトーショコラ貰っていいですか?」

のぞみ「いいよ、私もチーズケーキ貰うね〜」

三十分後……。

なぎさ「ごちそうさまでしたっ!」

響「お腹いっぱい」

のぞみ「あれ、チョコケーキ一個余ってるよ」

なぎさ「あ、あー、でもみんなお腹いっぱいだしこれは冷蔵庫に入
れちゃうね（まずったー！！一個千円のチョコケーキとつとくの忘
れてたー！！後で一人で食べようと思ってたのにー！！）」↑
皿を下げる

ガギッ！！↑チョコケーキの皿に伸びた五人のフォークがなぎさ
のフォークで止められた音。

なぎさ「……えーっと」

つぼみ「なぎささん…何してるんですか？」

ラブ「私たち…知ってるんだよ？」

なぎさ「な、何を」

のぞみ「そのケーキ一個千円の高級品なんだよね？」

咲「チョコクリームがとろふわのあつまあまでチョコー美味しいって
聞いたナリよ？」

なぎさ「ぬえっ！？な、なぜそれを……誰から、いつ聞いたの！？」

つぼみ「それは…」

三時間前

つぼみ『今日はなぎささんの家でケーキパーティーです』

ゆり『あら、つぼみ』

つぼみ『あつ、ゆりさん』

ゆり『そういえば今日だったわね、なぎさの家に行くのは』

つぼみ『はい！…ゆりさん達も来られればよかったんですけど…』

ゆり『私もえりか達も用事があるから仕方ないわ。気にせず楽しんでらっしゃい』

つぼみ『ゆりさん…』

ゆり『つぼみ、ひとついいことを教えてあげるわ』

つぼみ『え？』

ゆり『なぎさがケーキを買ってくるのは若葉台駅前に新しくオープンしたケーキショップね、なぎさの性格と財布事情を考えると買ってくるケーキの中に一個だけ高額な物があるはずよ。なぎさの好みを考えると買ってくるのは一個千円のチョコケーキね。そしてなぎさはそれを一人で食べようとするはずよ』

つぼみ『ゆりさん…』

ゆり『あとはうまくやりなさい、つぼみ…』

つぼみ『ゆりさん…はい!』

つぼみ「ということがありまして」

なぎさ「何であの人私のお財布事情知りつくしてんの!? お母さん!?!」

つぼみ「まあ、そんなわけで私達もそのケーキいただきたいんですよ」

ラブ「食べたいな〜きつと幸せゲットしまくれるんだろうな〜」

五人「フッフ…」

なぎさ「う…う…うわあ〜〜〜!」 ↑逃走

響「あ、逃げた!」

つぼみ「そんなに一人で食べたいんでしょうか…?」

のぞみ「みんなで追いかけよう!」

ラブ「待て〜〜！」

なぎさ「はあ…はあ…ここまで来れば…ん？」

「プリキュア！シューティングスターッ！」

なぎさ「げっ！？」

ドカアアアアアン！！

なぎさ「あ、あ、あ、あつぶな……そこまでするとかぶっちゃけありえないんですけど！！殺す気か！！」↑間髪よけた

ドリーム「あだだだ…、もう！よけないでよ！！！」

なぎさ「よけなきゃ死ぬでしょーが！！！」

「ダブルプリキュアキーク！！！」

なぎさ「ぎゃーっ！！！」

ドゴオオオオオオン！！

ブロッサム「あゝ、よけられました…」

ピーチ「だから無難にブロッサムシャワーとラブサンシャインにしようって言ったじゃん」

なぎさ「本気で殺す気か!!」↑また間一髪

ブロッサム「大丈夫ですよ、しょせんギャグ小説ですし死にやしませんって」

なぎさ「メタ発言自重!!」

ピーチ「っていつかなぎさが全員分のチョコケーキ買ってきたらこんなことにはならなかったのに…」

なぎさ「女子高生にとって六千円がどんだけ大金だかわかってんの!?!一個でも結構悩んだんだよ!!」

ブロッサム「それはそれ、これはこれ、です」

なぎさ「理不尽だ!!」

ドリーム「あれ?咲と響は?」

ピーチ「さあ?」

ブルーム「みんなーお待たせナリー!!」↑メロディを抱えて飛んでる

メロディ「良かったまだケーキある!」↑抱えられてる

なぎさ「いやいやいやいや、これはおかしいよ!?!」

ブルメロ「?」

なぎさ「キョトンとするな!!なんで一人で変身してんのよ 안타ら!!」

ブルーム「なんでって…ねえ?」

メロディ「まあ…ギャグ補正つてやつですよ、うん」

なぎさ「便利な言葉だなチクショウ!!」

ブルッサム「なぎささんも変身すればいいじゃないですか。出来ますよ、多分」

なぎさ「多分て…まあ、みすみす取られるよりはマシか…メップル!」

メップル「メポー!ってメップルの出番これだけメポー!?!」

なぎさ「うん」

メップル「ガーンッ!」

なぎさ「デュアル・オーロラ・ウェーブ!」

ブラック「ホントに変身できた…」

ドリーム「じゃ、遠慮なく。プリキュア!ドリームアタック!」

ブラック「うわっ!」↑よける

ブルーム「ナリヤーツ!」↑命中

ドリーム「あ、やべ…ま、いいや、ブルームだし」

ブラック「オiiiiiiii!一応先輩だよこの子!」

ブルーム脱落。

ブラック「いや早いな!どんだけ威力あるのよ!」

ピーチ「隙あり!おりやりやりやりやりや!」↑猛ラッシュ

ブラック「うわ、ちょ、どわっ、ぎゃーっ!!」

メロディ「すご…ケーキを持ちながら全部紙一重でかわしてる…」

ブロッサム「伊達に初代はやってないってことですね。なら、メロディ!」

メロディ「おっけー!奏でましょう、奇跡のメロディ!ミラクルベルティエ!おいで、ミリー!」

ブロッサム「集まれ花のパワー!ブロッサムタクト!」

ブラック「やばっ!!」

ピーチ「へ?」

メロディ「駆け巡れ、トーンのリング!プリキュア!ミュージックロンド!!」

ブロッサム「花よ輝け!プリキュア!ピンクフォルテウェイブ!」

ブラック「はっ!!」↑回避

ピーチ「ギャハーツ!」↑命中

ドリーム「ピーチーッ!」

メロディ「あ、やっちゃった」

ブラック「軽っ!!」

ブロッサム「まあ、やっちゃった物はしょうがないですね」

ブラック「鬼かアンタら!!」

ドリーム「ブラックひどい!!ピーチを身代わりにするなんて…この外道!!」

ブラック「アンタがそれを言うか!!」

ピーチ脱落

ブロッサム「さあそろそろ観念してもらいますよ」

ブラック「ぐっ…」

ドリーム「ケーキ!ケーキ!」

メロディ「うあ…今からヨダレが止まんないよ…」

ブロッサム「というわけで…」

三人「覚悟……っ……!」

ブラック「うわぁ……っ……!!?!」

ドカー……ン……!!

ドリーム「あだだ……」

メロディ「うゝん……」

ブロッサム「きゆう……」

ブラック「いった……はっ!ケーキは!?!」

グチャア……↑つぶれたケーキ

メロディ「あ……」

ブロッサム「あゝあ……」

ドリーム「ケーキ……」

ブラック「……あ……」

メロディ「?」

ブラック「イイ加減ニイイイイ……シャガレエエエエエエエエ
エエ！！！！！！！！」

ドガアアアアアアアアアアアアン!!!!!!!!!!!!!!

「ぎゃ ああああああああああああ！……！！！」

今日の教訓：先輩は大事にしろ。

ゆり「オチが弱いわね…もっと精進しなさい」

いつき「何様ですかアンタ」

おしまい

その三・ピンクプリキュアのケーキ大争奪戦！　く美墨なぎさの激怒く（後書き

舞「（咲に抱かれて空中散歩なんて…北条響許すまじ！！）」

響「ゾクッ！…なに今の悪寒…！？」

その四・正体予想のキュアミューズ！（前書き）

ドドリー「この作者には珍しいタイムリーなネタドド」

ミューズ「……………」

その四・正体予想のキュアミューズ！

響「うーん…」

奏「どうしたの？」

響「…ん？あ、奏。いやさ、キュアミューズって結局誰なのかな？
って」

エレン「ミューズ…メフィストを庇ってた。まさかとは思うけど敵
なのかしら？」

奏「それはさすがに…」

響「うーん……よし！」

エレン「響？」

響「今回はみんなの意見を交えつつ、ミューズの正体に迫っちゃおう！」

・第一候補、アコちゃん。

のぞみ「アコちゃんだよアコちゃん、もうぜーったいアコちゃん！」
えりか「アタシもそう思う！だってあの音吉さんの孫だよ？絶対そ
うだって！」

つぼみ「はい！それに颯爽と現れて助けに入り、何も言わず去って
いくところなんかすごく素敵です！」

いつき「それあんま関係ないような…」

響「やっぱり本命なのはアコちゃんか…」

・第2候補、西島和音。

かれん「可能性として捨てきれないのは彼女かしら」

祈里「響ちゃんの親友だし、無いことはないと思うの！」

りん「あたしもあの娘かな、なんかあの娘、他人とは思えないん
だよねえ…何故か」

ほのか「元キュアビート候補だし…あり得なくななくなないと

思っわ」

なぎさ「いやそれどっち!？」

エレン「なるほど」

第3候補、東原聖歌。

うらら「私はスイーツ部の部長さんだと思います!みんなを見守るお姉さん!こまちさんやかれんさんのポジションです!」

せつな「私も彼女を推薦するわ!」

ラブ「うをつ!?!せつながチョーやる気だ!」

こまち「同じ『東』だからかしら?」

咲「うららと同じ理由であたしもこの人!」

舞「咲が言うならこの人だわ!」

奏（どんだけ咲さん至上主義なんだろうこの人…）

ひかり「だ、だってこういう意外性もあるかな、って…」

奏「いない絶対いない！」

くるみ「いいじゃない！私達だってたまには面白い事言ってみたいのよ！」

美希「そつよそつよ！」

響「D A M A R E！！」

エレン「そんな…音吉さんが…！？」

ひびかな「信じなくていいから！」

第6候補、月影ゆり

ひびかなエレン「だらっしゃあああああああ………！」
↑
トリプルキック

ゆり「げぶあつ！…？」

つぼみ「ゆりさ………んっ！？」

響「色々聞いてはみたけれど」

奏「結局何もわからずじまい…」

エレン「でもそれでいいのかも」

ひびかな「え？」

エレン「どんな姿でも、ミューズが私達プリキュアの仲間って事は変わらないでしょ？だったらそれでいいじゃない！」

響「エレン…うん！」

奏「そうね…そうよね！」

響「いつかミューズとも解り合えるといいな」

奏「その時は腕によりをかけたカップケーキをご馳走するわ！」

響「ホント！？楽しみだな」

奏「響のはありませ〜ん」

響「え、ちょ、いいじゃ〜ん私にもケーキ〜!!」

エレン「あつ、二人とも待つて〜!!」

おわり
♪

いつき「なんかいい感じに終わった…」

その四・正体予想のキュアミューズ！（後書き）

響「来週はついにキュアミューズの正体が！？」

エレン「ようやくって感じね！」

奏「そしてメフィストとの関係は！？」

エレン「それも見所よね！」

響「トリオ・ザ・マイナーはこのままフェードアウトするのか！？」

エレン「それはどうでもいい」

ひびかな「ちょ、元同僚！」

その五・正体発覚のキュアミューズ！〜噂の毒舌小学生編〜（前書き）

エレン「今回短いわね…」

響「ホントだよね…エレンの出番もないし」

エレン「マジで！？」

その五・正体発覚のキュアミューズ！〜噂の毒舌小学生編〜

響「というわけでついにその正体が発覚したキュアミューズこと調
辺アコちゃんです！」

奏「みんな仲良くしてね♪」

アコ「…よろしく」

全「アコちゃんキターーーーーーッ!」

アコ「↑啞然

なぎさ「いやー、今や小学生もプリキュアになる時代なんだねえ
↑しみじみ

ひかり「なぎささん…年より臭いです」

のぞみ「よろしくね、アコちゃん!」

ラブ「早速だけどダンスとか興味あるかな？」

祈里「ラブちゃん勧誘しちゃダメ!？」

こまち「アコちゃん、新作の羊羹カレーはいかが？」

アコ「羊羹…カレー？」↑引ききみ

かれん「アコちゃん気にしないでいいから!こまちもやめなさい!」

えりか「ふっふっふっ…」

つぼみ「えりか?どうしたんですか?」

えりか「ついに小学生プリキュアが登場したわね!これでもう私を『史上最小プリキュア』なんて言う人はいなくなる!」

つぼみ「あー、そういう…」

いつき「まあ、いくらえりかでも小学生よりは大きいもんね…」

アコ「……」↑えりかに近寄る

いつき「?…アコちゃん?」

えりか「オーッホッホッホッホッ！！！」

アコ「ねえ」

えりか「ホッホッホッ…え？何よ」

アコ「……」↑ジロジロ

えりか「な、何よ」

アコ「ちっさ」

えりか「」

アコ「アンタ、自分の背の低さを悩んでるみたいだけど、私と比べて高くてそれでなんなの？」

えりか「」

アコ「私小学生、アンタ中学生。私が小さいのなんて当たり前じゃない」

えりか「」

アコ「大体、自分より下を見て…絶対的な自分の数値は上がってないのに喜ぶなんて、器が小さいにも程があるんじゃない？」

えりか「」

アコ「そんなだから自分の器の小ささが背丈に現れてるんじゃない？」↑嘲笑

えりか「orz」

つぼみ「えりかあああ!？」

いつき「な、なんという毒舌小学生…!」

響「いやー今日も絶好調だねえ、アコちゃん」

美希「え、アレがデフォなの!？」

くるみ「きつつ…」

りん「アンタは人のこと言えない」

くるみ「アタシはあそこまでじゃないわよ!」

とりあえず今回はここまで。
（まだアコちゃんのキャラがつかめて
ないダメ作者）

いつき「ええええ…」

その五・正体発覚のキュアミューズ！〜噂の毒舌小学生編〜（後書き）

アコ「ま、今後ともよろしくね」

トトリ「ー」よろしくトトリ「ー」

その六・アコちゃんのお姫様思い出話（前書き）

なぎさ「なんか最近だんだん短くなってない？」

ほのか「しょうがないんじゃないかしら？」

その六・アコちゃんのお姫様思ひ出話

アコ「レッツプレイ！プリキュア・モジュレーション！！」

ミューズ「爪弾くは女神の調べ！キュアミューズ！」

全「「「かーわーいーいー！！！！！」」」

いつき「何あの可愛い抱きしめていいですか！？」

美希「何言ってるのまずはあたしよ！！」

祈里「二人とも落ち着いて！！」

響「大人気だねーアコちゃん」

奏「可愛いからしょうがないわよ」

なぎさ「いやーそれにしても驚いたよ、アコちゃんがメイジャーラ

ンドのお姫様だなんて」

ひかり「そうですねえ…」

いつき「アコちゃん!!」↑発狂

アコ「きゃーっ!?!」

くるみ「ちょ、あれヤバくない!?!」

響「あー、ダイジョブダイジョブ」

奏「だって…」

エレン「姫様に何をするか————っ!!!!」↑飛び膝蹴り

いつき「げぶらあっ!?!」

くるみ「なんか飛んでキター————っ!?!」

響「アコちゃんがメイジャーランドのお姫様だってわかってからなんかエレンが従者魂に目覚めたみたいで…」

奏「なんて言うか…まさしく護衛役になっちゃって…」

つぼみ「あれは気合い入ってますね…本格的に」

くるみ「気持ちは解らないでもないけど…」

かれん「まあ、ねえ…」

のぞみ「ねえねえ、アコちゃんってお姫様なんだよね？」

アコ「そうだけど？」

うらら「いいですよー、お姫様！女の子の憧れですよー！」

アコ「そうは言うけど…良いことばっかじゃないわ」

のぞみ「そうなの？」

アコ「例えば…」

アフロディテ『アコ、メイジャーランドの姫として貴女は学ばなければならぬ事がたくさんあります。覚悟はいいですね？』

アコ『はい、ママー！』

アフロディテ『ではまずは発声練習からです。ラーラーラーラー
ー』

アコ『らーらーらーらーらー！』

アフロディテ『もっと肩の力を抜いて！お腹に力を入れるのよ！』

アコ『ハ、ハイ！らーらーらーらー！』

アフロディテ『もっと、もっと熱くなるのよアコ！』

メフィスト『（頑張れよアコ！パパは応援してるぞ！）』

うらら「それなんて松岡。造ですか？」

アコ「歌に関してママはとてもスパルタだったわ。それこそ松。修造なんてメじゃないくらいに」

咲「メフィストさんはどうだったの？」

アコ「パパは…」

アコ「……グスッ……」

メフィスト「アコ？」

アコ「パパ……」

メフィスト「どうした？またママと喧嘩したのか？」

アコ「……」

メフィスト「…ママだってアコが憎くてキツく言っている訳じゃないんだぞ？」

アコ「え…？」

メフィスト『ママは言ってたよ、いつかアコは幸せのメロディを歌うほどの歌い手になる、って』

アコ『ママが…?』

メフィスト『ああ、だからアコには頑張ってたほしいうて言っていた。アコが頑張るのならいつまでも応援する、ともね』

アコ『……パパ』

メフィスト『ん?』

アコ『私、やる。頑張ってみる!』

メフィスト『……ん!そうか!』

アコ(そんなこともあったなあ……)

のぞみ『アコちゃん?』

アコ『…何でもない』

咲『?』

お
わ
り

その六・アコちゃんのお姫様思い出話（後書き）

のぞみ「お姫様になったらお菓子食べ放題かなあ？」

りん「そんなわけないでしょーが！」

番外編・ゴーカイプリキュアコラボで派手に行くぜ!!

全「コラボキターーーーーーッ!!!!!!」

なぎさ「いやー、まさか私達とコラボしたいって言う人が現れるなんて…」

えりか「すごいよね、結構人気あるんだねこの小説」

ゆり「で？ゲストは誰なのかしら？」

響「んじゃ、待たせるのも悪いしゲストの方、どうぞ!」

「ゴーカイレッド！」

「ゴーカイブルー」

「ゴーカイエロー」

「ゴーカイグリーン！」

「ゴーカイピンク！」

「ゴオオオオオカイ…シルバアツ！」

「海賊戦隊！」

「『ゴーカイジャー！』」

響「今日来ていただいたゲストはキュアノアさんの『リリカルキュアライダー学園！』より、海賊戦隊ゴーカイジャーの皆さんです！」

舞「鎧さん、字数取りすぎです」

ゆり「銀色自重しなさい」

鎧「同じ銀色に言われた!？」

ルカ「いや実際長いし」

ハカセ「確かにちょっとテンポ悪いよね」

鎧「ヒ、ヒドイ…orz」

エレン「アハハ…ところで皆さんは今日は何をしに？」

マーベラス「決まってるだろ。プリキュアの大いなる力を貰いに来た！」

えりか「なるほど、じゃあひかり、後は任せた」

ひかり「何ですか!？」

えりか「いやだってさ、キュアノアさんトコの『ゴーカイジャーVSプリキュア』でもひかりがキーパーソンだったじゃん?だったらこっちでもそうじゃないかなって」

ひかり「それは向こうの話じゃないですかー!」

鎧「だったら皆さん!こういうのはどうでしょうか!」

ジョー（復活早いな…）

鎧「俺たち6人がそれぞれのプリキュアチームの皆さんと一緒にこ

とをやるんです！ひとつの事を共に成し遂げることでお互いの気持ちを通じあい、大いなる力を生み出すハズ！多分！」

アイム「多分…ですか？」

マーベラス「ま、何もしないよりはマシか。いいぜ、やってやろうじゃねえか！」

マーベラス & amp ; マックスハート組
タコカフェのお手伝い

マーベラス「おいコレ絶対俺より適役いただろ、アイムとか」

ひかり「アイムさんはつぼみさん達のところですよ」

アカネ「いやー、まさかひかりにこんなイケメンの知り合いがいたなんてねえ、しかも…」

マーベラス「ん？」 ↑ 物凄い鮮やかな手つきでたこ焼を作っている

アカネ「あたしより上手いんじゃないのコレ…なんか自信なくすなあ…」

ひかり「アハハ…」

なぎさ「作り方の基本を一通り教えただけでコレとは…」

ほのか「天才肌なのね、きっと」

ハカセ&スプラッシュスター組
風景画を描く

ハカセ「むう…思ってたより難しいね、これ」

舞「最初は難しくて描いていけば少しずつ慣れていきますよ、私もそうでしたから」

ハカセ「なるほど…じゃあもうちょっと頑張ってみようかな」

咲「舞ー！助けてー！」

舞「どうしたの？」

咲「なんかどんどんぐちゃぐちゃになっちゃって…全然うまく描けないナリ…」

舞「あー、こういう時は…」

ハカセ「仲いいなあ、あの二人」

満「それはどうかしら」

ハカセ「うわあっ!？」

満「舞は咲の事が好きだから…ほら」

ハカセ「え？」

舞「ほらここはこうして…」↑咲に擦り寄ってる

咲「うつむ…」↑気付いてない

ハカセ「何あれ近すぎない？密着ってレベルじゃないんだけど」

満「最近の舞の趣味は隙あらば咲をクンカクンカして悦に浸ることなのよ」

ハカセ「ちょ、普通に変態だ!？」

満「しょうがないわ…作者の舞のイメージがそんなんだから」

ハカセ「そんなメタいこと言わないでよ…」

満「そろそろ帰るわ、じゃあね」

ハカセ「え、あ、ちょっと……なんか、無駄に疲れたな…」

ルカ&mp・5GoGo編
ナッツハウスでお手伝い

ルカ「ムリムリムリムリ接客とかホントに無理!！」

うらら「そんなこと言わずに!！」

りん「腹括ってくださいよ!！」

ルカ「だってー!！」

夏^{ナッツ}「…大丈夫なのか？」

こまち「大丈夫よナッツさん…多分」

小々田「まあ、信じてみようよ」

夏「むう……」

くるみ「お客さん来たわよ」

ルカ「イイイイラッシャイマセセセ」↑ガチガチに緊張してる

かれん「…接客は無理みたいね…」

のぞみ「うーん…あ！じゃあさ、りんちゃんのお手伝いしてもらおうよ！」

りん「じゃあ一緒にアクセサリ作っていきましょう！」

ルカ「……」

りん「…？…どうしました？」

ルカ「いや、ホントにビーズとかだけなんだなーって思ってる」

りん「…何か言いたげですね？」

ルカ「んー…何て言うか、安上がりだなー、って」

りん「…確かにそうですね、でも…」

ルカ「？」

りん「そんな安物でも、誰かの喜ぶ顔が見れるなら作る意欲が増すじゃないですか。そういうのって商品の質とか金額とかじゃないと思います」

ルカ「…なるほどね、そういう考え方もありか」

りん「え？」

ルカ「何でもない」ほら、さっさと作っちゃおう！」

りん「うわ、ちょ、ルカさんそんな乱暴に扱っちゃダメですって！」

うすら「なんかあの二人、いい感じですね！」

のぞみ「でっしょー？」

ジョー&フレッシュ組
一緒にダンス

ラブ「ところでジョーさん、ダンスの経験は？」

ジョー「一切ない」

祈里「だったらまずは、私達のダンスを見てもらいましょうよ！」

美希「そうね、それがいいかも」

せつな「任せて！精一杯頑張るわ！」

ラブ「よし、『クローバー』行くよ！」

クローバー、ダンス中…

ラブ「はあ、はあ…たはー、久しぶりだったから体なまってたねー！」

祈里「そ、そういえば私、ダンス自体すごい久しぶりだったかも…」

美希「私も…。せつなは？」

せつな「私はラビリンスに戻ったあとも時間を見つけて練習してたから…」

ラブ「うあー、私怠けてたよう…」

ジョー「…スゴいな」

ラブ「え…？」

ジョー「いや、素直にそう思った。お前らは久しぶりと言っていたがそれを感じさせないほどだ」

美希「そんなに誉められると…」

祈里「なんだか照れちゃうなあ…／＼／」（照）

ラブ「エヘヘ…さあ！次はジョーさんも一緒だよ！」

ジョー「…お手柔らかに頼むぞ？」

ラブ「できる限りね♪」

アイム&ハートキャッチ組
一日ファッションモデル

えりか「と、いうわけでアイムさんには一日ファッションモデルを体験してもらうよ!」

ももか「急に來て『衣装部屋貸して!』とか言うから何かと思ったけど…」

ゆり「ごめんなさいね、ももか。仕事の最中だったんでしょう?」

ももか「え? ああ、気にしない気にしない! 一時間くらいなら使用許可出てるから好きに使っちゃってよ!」

つばみ「ももかさんはこれから仕事ですか?」

ももか「そうなのよー、ってヤバッ! もう時間だ! それじゃね!」

↑退出

アイム「…お忙しい方ですね…」

ゆり「それがももかの選んだ道だもの」

アイム「私、こういうことは初めてなのですが、大丈夫でしょうか」

えりか「ダイジョーブだって！本編でもコスプレしてたじゃん！」

アイム「え、えりかさん！」

いつき「えりか…デリカシーが無さすぎだよ…」

えりか「え？」

えりか「さーで、そ・れ・じゃ・あ…♪」↑ニヤリ

アイム「…！！」↑悪寒

えりか「れつつお着替えタイムッ…！」

アイム「きゃーっ!？」 ↑ 試着室に連行される

つぼみ「いいんですかね、あれ……」

ゆり「ほつときなさい、何かあったら『これも来海えりかってやつの仕業なんだ』って言えばいいのよ」

いつき「どこのカイザですか、それは……」

十分後……。

えりか「みんなお待たせー!」

アイム「うう……//」

つぼみ「ほあ……アイムさんスゴく可愛いです!……」

えりか「普段がお姫様風だから、今回はカジュアルな感じでまとめってみました！」

ゆり「中々いいじゃない、とても似合ってるわ」

アイム「ち、ちょっとスカートが短くありませんか？」

えりか「ダイジョーブだって、アイムさん足綺麗だし！あ、ストッキングやめて生足出すのもいいかも！」

アイム「そ、それはちょっと…恥ずかしいです…／／／」

えりか「ええゝ、勿体ないなあ。絶対似合うのに…」

アイム「…あ！だったらえりかさんがコレを着てみるというのはどうですか？」

えりか「うえっ！？ムリムリアタシそんなフリフリ似合わないって！」

アイム「大丈夫です！絶対似合います！」

えりか「ええゝ…どうかなあ…」

つぼみ「…楽しそうですね、あの二人」

いつき「そうだね、なんだかスゴく仲良くなった感じ」

ゆり「そうね…」

鎧&スィート組

響とPK勝負

鎧「あれ？俺らのとここれだけですか？」

響「イロイロ考えたけど…私がやりたいからこれにしたの、それに…」

鎧「？」

響「そろそろ尺ないし…」

鎧「そんな理由！？」

響「とにかく！やるからには全力勝負だからね！ヨロイさん！」

鎧「あ、鎧^{がい}です」

響「それじゃあいくよ！私のシュートが止められるかー！？」

鎧「よっしゃこーい！」

奏「響頑張れー！…『響がシュートを決める』に一票」

エレン「鎧さん負けるなー！…『鎧さんがシュートを止める』に一票」

アコ「…その時不思議な事が起こった！』に一票」

かなエレ（…BLACK RX？）

響「どりゃー！…」↑シュート

鎧「なんのー！！」↑ボールヘジャンプ

その時不思議な事が起こった！

響の蹴ったボールは同時に発生した謎の重力エネルギーの影響を受け急加速！

そして…

バゴーンッ！！

鎧「べぶらあっ！！？」

響「あっ！？」

鎧の顎を打ち抜き虚空の彼方へと消えていった…。

響「……」 ↑ 啞然

鎧「」 ↑ 気絶

かなエレ「」 ↑ 茫然

アコ「…私の勝ちね」

マーベラス「おい鎧、俺ら色々やったが結局大いなる力は手に入らなかったぞ？」

鎧「うゝん、何か違ったんですかねえ…？」

ルカ「ちょっと、まさか見当違いだったわけ？」

ジョー「骨折り損、か…」

「???」「ふははははは！！どうやら無駄足だったようだな海賊共！
！」

マーベラス「あ？」

ひかり「いったいなんですか!？」

鎧「あーっ！あいつは!」

ワルズ・ギル「そうとも！！この俺こそ宇宙帝国ザンギャックの次期皇帝…ワルズ・ギル様だ！！」

ジョー「皇帝のバカ息子…!」

なぎさ「親のスネかじり…！」

美希「名前負け司令官…！」

咲「バーカバーカ！」

ワルズ「うおいそこお…！初対面の相手にそこまで言うか…？」

ルカ「うるさいバカ皇子…！こんなとこまで一体何の用！？このK
Y皇子…！」

ワルズ「フンツ…！知れたこと、プリキュアの大いなる力を手に入
れ、帝国の力とするのだ…！」

こまち「なんですって…？」

アイム「プリキュアの力をそんな事に使おうとは…！」

響「絶対に許せない…！みんな、いくよ…！」

マーベラス「お前ら、いくぜ…！」

変身バンク省略！

マリ「ちょ、おい！手抜きすんな！！」

ブロッサム「どうしましたマリン？虚空に叫んで」

Gレッド「派手に！」

メロディ「いっくぞー!!」

ワルズ「行け！ゴーミン、スゴーミン！」

「ゴーン!」

スコーミン「スコー！」

ゴークイジャー & a m p ・プリキュアオールスターズ「うおおおおお!!!」

「！」「」

「！」

ワルズ「やれ！」

強化スゴミン「スゴー！」 ↑砲撃

Gシルバー「うわあっ!？」

リズム「鎧さん!？」

ビート「大丈夫ですか!？」

Gシルバー「俺は大丈夫です…でも…!」

Gレッド「ちっ、やるじゃねえか」

ワルズ「ふははははは!!どうだ!この日のために用意した強化スゴーミンは!さあ、トドメだ!!」

強化スゴミン「スゴー!」

ドガドガドガアアアアアアン!!!!

ゴーカイジャー「うわあああああああ!？」

プリキュアオールスターズ「きゃあああああああ!？」

ルカ「うあっ！」

アイム「きゃああっ！」

Gブルー「しまった、ルカとアイムが！」

ワルズ「よしスゴミン！まずはその二人から始末しろ！」

強化スゴミン「スゴッ！」

ルージュ「そんな事！」

マリン「させないんだから！！」

ドガア！！

強化スゴミン「スゴオッ！？」

ワルズ「なにっ！？」

ルカ「りん……」

アイム「えりかさん……」

ルージュ「やめてよね……ルカさんは私の……」

マリン「アイムさんはアタシの……」

ルージュ・マリン

「大事な友達なんだから!!」

ルカ「りん…なんで…」

ルージュ「自分の好きな事を一緒にやれる人…、そういうのって友達、じゃないんですか？多分ですけど」

ルカ「りん…」

マリン「それ、チョー同意！まだアイムさんに似合うコーディネー
トいっぱい考えてるんだから！こんなところで負けてらんないのよ
！」

アイム「えりかさん…」

ワルズ「おのれおのれおのれえ！この虫けら共めえ！」

ルージュ「ルカさん、まだいけるよね？」

ルカ「…あつたりまえじゃん！」

マリ「ほら、アイムさんも！」

アイム「…はい！」

その時、ルージュとマリンの胸のクリスタルから光が飛び出した！
ルージュから飛び出した光はルカの手収まり黄色いキーへ、マリ
ンから飛び出した光はアイムの手収まりピンク色のキーへと変わ
った。

アイム「これは…レンジャーキー？」

ルカ「なんでもいいよ。いくよ、アイム！」

アイム「…はい！ルカさん！」

ルカは右手で、アイムは左手でモバイレーツを構えそして変身の言
葉を叫びながら黄色とピンクのキー…『プリキュアキー』を差し込
んだ！

ルカ・アイム「レッツプリキュア！ゴーカイス克蘭ブル！」

『ゴオオオオオオカイ！

プリツキュアアアアアア！』

その瞬間二人は光に包まれ、光が晴れたとき、その姿は大きく変わ
っていた。

G レッド「これが…」

G ブルー「プリキュアの…」

G グリーン「大いなる…」

G シルバー「力…」

まずルカは、頭にはバンダナを巻き、長くなった髪をポニーテールにしている。

衣装はキュアブラックの旧コスチュームをベースに黄色をベースカラーにして全体的に鋭角なデザインに変わっている。両腰にはゴークaiserベルが一振りずつ提げられており、ルカの得意な二刀流がすぐ使えるようになっていた。

そしてアイムは、お姫様を意識したティアラを装備。髪型には特に変更はない。

衣装はキュアムーンライトをベースにスカート部分をキュアイーグレットの物に変えて、ベースカラーをピンクに変更。全体的に丸みを帯びたデザインに変わっている。両腰にはホルスターに入ったゴークigerガンが納められており、アイムの得意とするガンカタ戦法をすぐに使えるようになっていた。

完全にその姿が露になると二人は目を開き、敵に向かって堂々と名乗りをあげた！！

ルカ「海原巡る閃光、キュアバンデッド！」

アイム「海原たゆたう子守唄、キュアフェアリー！」

バンデッド・フェアリー

「二人はプリキュア！ゴーカイエディション！」

Gシルバー「ルカさんとアイムさんが…」

Gグリーン「プリキュアになっちゃった！？」

バンデッド「ちょ、なにこれ！？」

フェアリー「私達、プリキュアになってしまったのでしょうか？」

ベリー「これは…」

パッション「こんなことってあるのね」

ブラック「これがプリキュアの大いなる力なの？」

ルミナス「ルージュとマリンの『友達を助けたい』という思いが大いなる力を生み出したんです！」

ミューズ「その銀色の言ってた事もあながち間違いじゃ無かったってことね」

Gシルバー「もしかして銀色って俺のこと?」

Gブルー「お前以外にいるのか?」

ワルズ「な、なにいいいいい!? クッソー、こうなればもう大いなる力などどうでもいい!!! この場で全員抹殺だ! やれスゴーミン
!!!」

強化スゴーミン「スッゴーツ!!!」

バンデッド「なんかよく解んないけど... ま、いつか。とにかく派手に!!!」

フェアリー「参りましょう!!!」

マリン「ルージュ! アタシ達も!」

ルージュ「オッケー!」

Gレッド「...ここはアイツラに任せて良さそうだな」

メロディ「だね」

バンデッド「そらそらそらあっ!!」

ズバズバズバズバアッ!!

強化スゴーミン「スゴオッ!？」

フェアリー「はああっ!!」

ズドドドドドドドドッ!!

強化スゴーミン「ゴーツ!？」

マリン「うりやあっ!!」

ドガッ!!バキィッ!!

強化スゴーミン「スッ、ゴッ!？」

ルージュ「だりやあああ!!」

ズガアッ!!ドガアッ!!

強化スゴーミン「ゴーツ!？」

パイン「やった!あと一体!」

強化スゴミン「ス、スゴ……！」

ルージュ「マリン、いくよ！プリキュア！ファイヤー・ストライイ
イイイク！！」

マリン「オッケー！花よ煌めけ！プリキュア！ブルーフォルテウエ
エエエエイブ！！」

ドカアアアアアアアアアアア
ン!!!!!!!!!!!!

強化スゴミン「スゴオオオオオオオオツ！？！？」

ワルズ「そ、そんな……」

バンデッド「さあ、今度こそアンタだけよ」

フェアリー「覚悟はよろしいですか？」

ワルズ「ぬぐうつつ……こつなれば……」

「バンデッド？」

ワルズ「逃げる!!」
↑ダッシュ

バンデッド「あ、コレ!」!

フェアリー「逃がしません！！」

『ファアアアルウェエエエエブ!!!』

バンデッド「プリキュア！ゴーカイクレッセントスラッシュー！」

フェアリー「プリキュア！ゴーカイバレットレイン！！」

バンデッドのゴーカイサーベルから放たれた2つの三日月状のエネルギーカッターが不規則な軌道を描きながらワルズ・ギルに迫る。そしてフェアリーのゴーカイガンから放たれた弾丸は上空で爆散して雨のようにワルズ・ギルに降り注いだ。

ドガアアアアアアアアアン!!!!!!!!!!!!!!

!!!!!!!!!!

ワルズ「おのれええええええええええ覚えている海賊共おお
おおおおお!!!」

ウルズ・ギルは星になった…。

マーベラス「さて、それじゃ俺たちはそろそろ帰るぜ」

ひかり「そうですか…なんだか寂しいですね…」

なぎさ「あれ？ひかりもしかして…」

ほのか「まさかこっちのひかりさんも…？」

ひかり「え？……っ！？／／／ち、違いますよ！！そんなんじゃないです！！／／／」

なぎほの「へへそうなんだ」↑ニヤニヤ

ひかり「ううう…／／／」

マーベラス「？」

ハカセ「今度はもっと絵が上手になっておくよ」

舞「はい！期待して待ってますね」

咲「今度来るときは満や薫にも紹介してあげるね！」

ハカセ「うん！約束だよ！」

ルカ「なんていうか色々ありがとね、みんな」

こまち「一番お礼を言われるべきなのはりんさんじゃないかしら？」

かれん「それもそうね」

りん「へ？あたし？」

のぞみ「そうそう」

うつら「なんたって初めての共同作業を共にした仲ですし！」

くるみ「それなんか違わくない？」

りん「結婚式のケーキ入刀か！？」

ルカ「…クスッ、アハハハッ！ホントアンタらって面白いね！…またね、りん」

りん「！…うん。また、いつか」

ジョー「今日は貴重な体験をさせてもらった、礼を言う」

ラブ「いやいやこっちこそだよー！」

祈里「ジョーさん飲み込み早くて驚いちゃった」

美希「あんなに完璧なダンス、初めて見たわ」

せつな「ジョーさんは精一杯頑張ってたもの」

ジョー「フツ…じゃあな」

ラブ「うん、また来てよ！今度はカオルちゃんのドーナツご馳走するからさー！」

ジョー「…楽しみにさせてもらおう」

アイム「皆さん、お世話になりました」

えりか「そんなの気にしないでいいよ！だってアタシ達友達じゃん

「！」

つぼみ「そうですよ！えりかの友達なら、私の友達ですし、いつきの友達ですし、ゆりさんの友達でもあるんです」

いつき「そういうこと」

ゆり「全くこの娘達は…でも私も同意見ね」

アイム「皆さん…ありがとうございます…！またいつか、お会いしましょう！」

えりか「うん！」

つぼみ「はい！」

いつき「もちろん！」

ゆり「ええ」

鎧「響さん！今度会ったときにはPKで再戦しましょう！」

響「望むところよ！」

奏「二人とも張り切っちゃって…うふふ」

エレン（結局あの不思議な事はなんだったのかしら…）

アコ「ま、気が向いたらまた来なさいよ。ケーキくらいなら出すわ、
奏が」

奏「私!？」

鎧「アハハ…では皆さん!またお会いしましょう!」

ゴオオオオオオ…↑飛び立つゴーカイガレオン

鎧「みなさん!また会いましょうね!」

ハカセ「バイバイ!」

アイム「皆さんお元気で!!」

ルカ「まっ たね!!」

ジョー「フツ…」

マーベラス「へっ、 たく…行くぜお前ら!全速前進!」

つぼみ「行っちゃいましたね…」

のぞみ「うん…あれ?りんちゃん泣いてる?」

りん「…は!?!なんで!?!」↑目元ゴシゴシ

うらら「あ、もしかして寂しいんですか?」

りん「そんなんじゃないって!?!」

いつき「ふふふ…あれ?えりかも?」

えりか「うえっ！？そ、そんなんじゃないって！？こ、これは…そう、心の汗だよ…！」

つぼみ「えりか…その言い訳は苦しいし古いですよ？」

えりか「うぐっ！？」

ゆり「クスッ…認めた方が楽よ？えりか」

えりか「ううう…！むが—————っ！…！」

ルカ「……へへっ♪」

アイム「ルカさん？」

ルカ「プリキュアかあ、まさかアタシ達になっちゃうなんてねえ」

アイム「そうですねえ、驚きました…」

$$\vdots$$

アイム「ルカさん？ どうしました…え！？」

アイム・ルカ「ええええええええええええ！?!?!?!?」

二人に何が！？真相は後書きで！

おわり

番外編・ゴーカイプリキュアコラボで派手に行くぜ!!（後書き）

ルカ「ママママーベラスウ!!みんなぁ!!」

マーベラス「どうした?」

アトム「これを見てください!!」

鎧「あれ?これってあの時のプリキュアキーですよね?」

ハカセ「何これ、石みたいになってる…」

ルカ「ちよつと鎧!これどういう事よ!?」

鎧「うえっ!?!いや俺もちよつとわかんないっす…」

ジョー「必要がなくなったから石になった…!ということか?」

アトム「そういう事なのでしょうか?」

ルカ「ええゝ、そんなぁゝ…」

マーベラス「…いいじゃねえか」

ルカ・アトム「え?」

マーベラス「例え使えなくなったとしてもそれはお前らの『友情』
ってやつのは証だろ?」

ルカ「マーベラス…」

マーベラス「だったらそれでいいじゃねえか。一番大事な意味が消えてねえならな」

アイム「…そうですね！その通りです！」

ルカ「…ふーん、たまには良いこと言うじゃん、マーベラス」

マーベラス「たまに、は余計だ」

キュアノアさん、コラボありがとうございました！

今回ゴーカイジャーが手に入れた『石になったプリキュアキー』は石から復活させて使うのもそのまま御守りにするのも、ご自由にお使いください！

そしてもう一度、コラボありがとうございました！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7457v/>

プリキュアショートシアター♪

2011年11月7日20時11分発行